

01 卒業設計

北木採石トポフィリア

小林璃央（遠藤研究室）

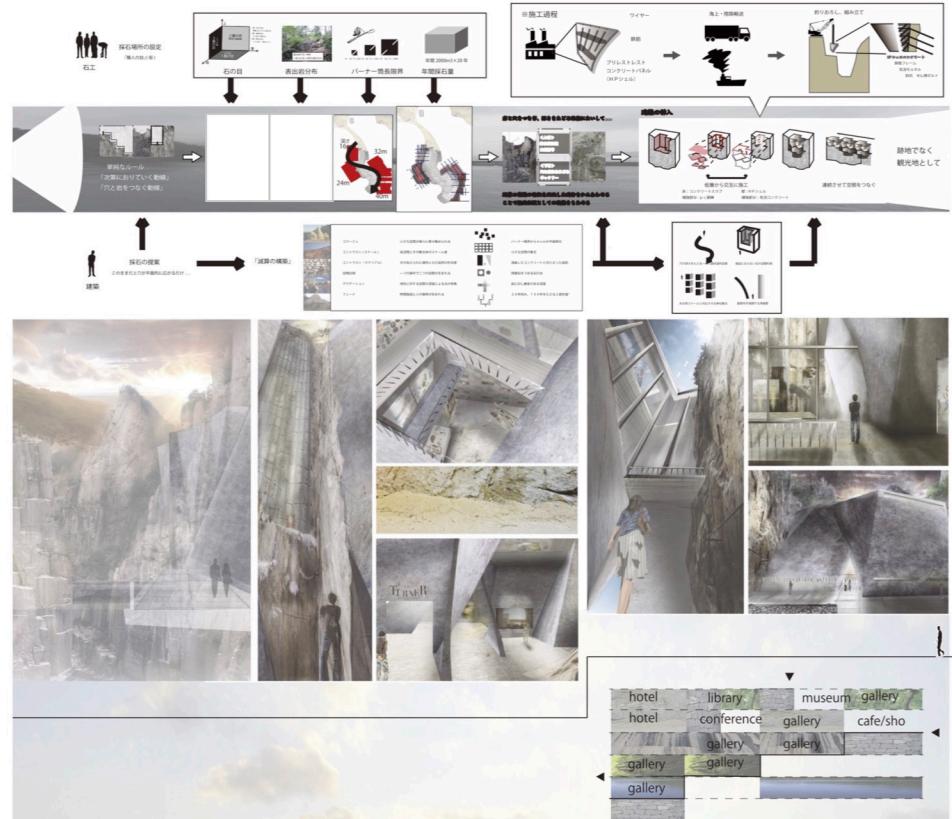
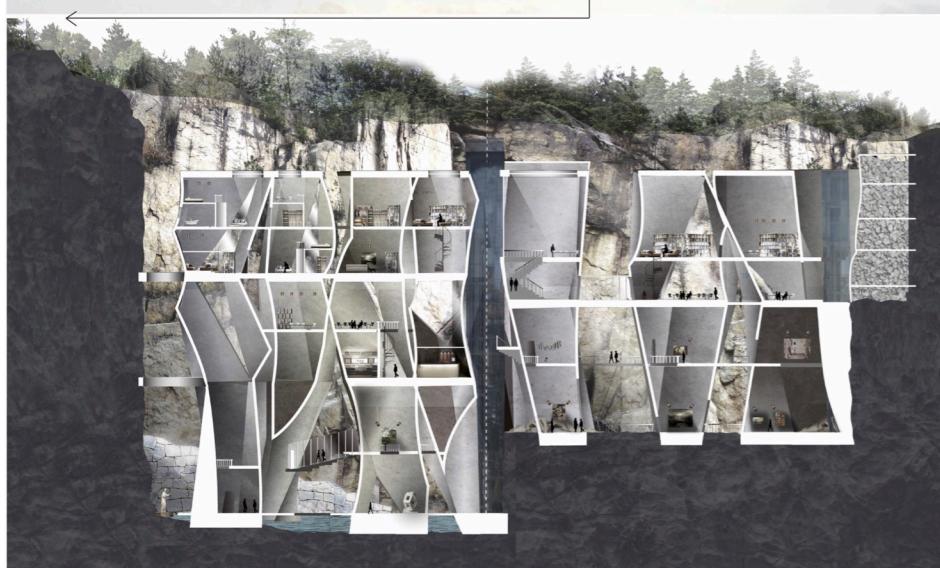
開講年次：学部4回生後期

神戸大学建築卒業設計賞 大賞

岡山県南西部瀬戸内海に浮かぶ北木島の鶴田石材店採石場。

150年かけて現在も採石中のこの場所は、切り立った岩肌に囲まれた最深120mにもなる巨大な穴があいている。訪れる人を圧倒するスケールと削岩に伴う様々な自然、採石という特殊な地形操作は『土木用地』以上の価値を秘めている。

20年の採石終了後を見据え、瀬戸内国際芸術祭と連携したギャラリーを中心とした観光地化を提案する。



神戸大学建築卒業設計賞 木南賞

九年間の旅路

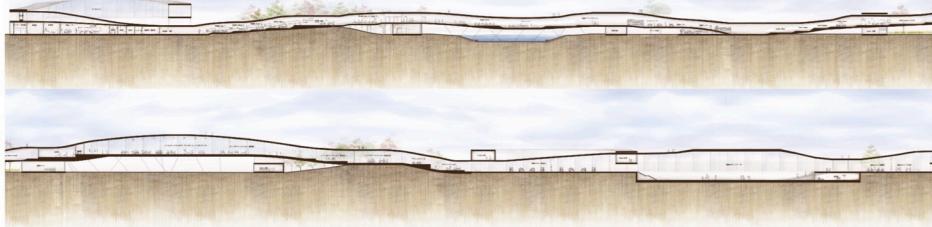
橋本阿季（遠藤研究室）

こどもがこどもを生きる学校。

この学校に教室はなく、あるいはたくさんの気付きの種が落ちている様々な分野の「みち」の連続。

いっぱい遊んでけんかして、歌を歌ったり森を探検した日もあった。

こどもたちが9年間いろんなことに夢中になって、旅をするようにたくさんのかげがえのないものに出会う空間。



神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

Urban Share Tree

- 可変的な共用空間を持つソーシャルアパートメント -

渡辺駿悟（山崎研究室）

今あるプライバシーを最優先した集合住宅ではない、新しい集合住宅を提案する。近年日本でも注目されているソーシャルアパートに階層的なシェア空間を入れていくことで、様々な住人や地域の人たちの交流できる場をつくる。また、この建物は木が季節によって葉のつけかたを変えるように、個室が1年単位で変化し、その周りのシェア空間も少しづつ変わっていくことで、その街らしい暮らし方をファサードに見せる。



神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

窓を開けなくなった私たちへ

— 気配の共有から始まる都市単身者住居の提案 —

加藤実悠（遠藤研究室）

一人暮らしを始めてから、ふと気付くと私は窓を開けなくなっていた。隣に住む人も知らず、部屋という囲われた空間の中で過ごす毎日。私たちはいつから窓を開けなくなったのか。本計画は窓を人や自然、街の気配を感じるメディアととらえることで、時間や季節、人に影響され積み重なることにより常に変化する、孤立した単身者住居でもなくシェアハウスのような物理的な空間の共有でもない都市単身者住居を提案する。

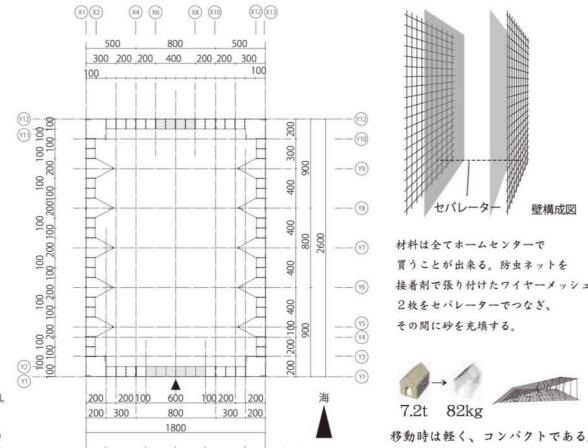
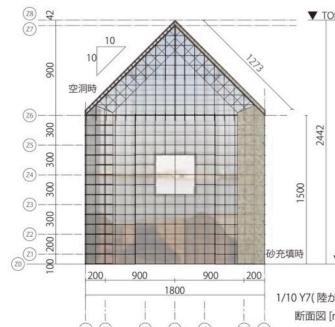


砂の方丈

楠目晃大（楳橋研究室）

砂や土といったものはその地に根ざした土着性を最も如実に表すもの。
この素材を使った建築こそが限りなく原初的なすまいとなるはずである。
これは放浪する土着建築。
砂浜を巡り歩き、そこですまおう。
私の方丈記の始まりである。

島国日本には無数の砂浜がある。
同じ数だけ砂の方丈の建ちうる場所がある。
それぞれの場所で景色は違い、砂も違う。
この建築はそれぞれの地でその土を着る。



神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

2013年度卒業設計発表会

審査講評

足立裕司
神戸大学大学院教授 審査委員長



2013年度の卒業設計は例年に比べてレベルが高く、選考に駆けつけていただいた非常勤講師の先生方が最も好評をいただきました。発表に参加した31名の皆さんへの努力をまず労いたいと思います。

卒業設計賞の選考対象となる10作品は比較的順当に選ばれました。選考対象に選ばれなかった作品の中にも、例年であれば選ばれていたと思われるような力作があり、大野晴臣君の団地再生を目指した「架けること、歩くこと、そして住む」ということや、木造のジェットコースターのリノベーションを試みた原川圭示君の「夢の跡」は印象に残る提案でした。花岡航君の「ジカン × ジブン島」や安田論史君の「Earth Diver」も中間発表から格段の深化を遂げて優れた作品となっていました。

対象10作品について審査委員から質疑と追加説明があり、1人3票の投票を行いました。結果は上位4作が高得票を得、5~7位が僅差で並びました。5位となった中村未明さんの「弔」と同票の河本淳史君の「Image of Reminiscence -都市における水の様態の再構築-」はどちらも人と生活にとって重要なテーマを選んだ作品であり、表現も詩的な雰囲気を漂わせる優れた作品でした。再投票により3次投票候補作品に選ばれた楠目晃大君の「砂の方丈」は従来の卒業設計の殻を破る実物大の模型を伴う実践的な制作として会場の注目を集めました。

3次投票では上位3作に票が集中しましたが、4位となった加藤実悠さんの「窓を開けなくなった私たちへー気配の共有から始まる都市単身者の住居の提案」も日常の行動と若者の都市居住への提案であり、豊かな感性が伝わってくる作品でした。やや自己完結的に切り捨てられた計画面での配慮がもう少し突き詰められておれば、おそらく最優秀の候補の残ったと思われます。

最後まで残った3作はまさに僅差の選考となりました。4次投票では審査委員2票の投票を行ったために3作が14~15票と団子状態になったために、最優秀1作を選ぶ5次投票の結果、渡辺駿悟君の「Urban

Share Tree -可変的な共有空間を持つソーシャルアパートメント-」が惜しくも3位となりました。個の空間と共有空間が必要に応じて可変的に変化する豊かな住空間の提案でした。今後の追求により、より優れた提案へと昇華していく可能性をもつ作品でした。

上位の2作は、おそらく評者の視点により評価が逆転するものであったと思われます。最優秀となった小林璃央さんの「北木島のトボフィリア」は日本を代表する花崗岩の産地であった北木島の石切場跡に注目した力作であり、詩的な感性があふれる完成度の高い作品でした。一方の木南賞となった橋本阿季さんの「九年間の旅路」は子供達に優しく語りかけるような、童話のような筆致によってこれまでの学校のイメージを変える作品となっていました。2層のレイアをもう1つ増やしておれば、批判された機能面での充実が図れたのではないかでしょうか。

大学の賞は大学教育の延長上で評価されていくものですが、学外には多くの異なる視点による評価があります。そうした発表の機会を捉え、常にチャレンジしていくことを願っています。



会場：神戸大学百年記念館六甲ホール

審査委員

足立教授を審査委員長とし、選考会選考委員は計画系の全教授6名（足立、遠藤、黒田、北後、三輪、山崎）、准教授3名（大西、近藤、楳橋）、寄附講座特命准教授1名（福岡）および当日全作品の発表を見て頂いた多賀教授・難波准教授の2名、ならびに選考会参加を受諾いただいた非常勤講師12名（設計系演習担当：島田陽、山隈直人、李暎一、竹口健太郎、大谷弘明、近井務、城戸崎和佐、長濱伸貴の各氏、大学院学内インナーシップ担当：芦澤竜一、岩田章吾の各氏）の計22名とした。

得票数一覧

氏名	卒業研究 項目	2次	追加	3次	4次	5次	決戦	最終結果
小林 琉央	北木探石トボフィリア	9		10	15	8	11	大賞
橋本 阿季	九年間の旅路	14		12	14	8	10	木南賞
渡辺 駿悟	Urban Share Tree -可変的な共有空間を持つソーシャルアパートメント-	11	10	10	15	6		優秀賞
加藤 実悠	窓を開けなくなった私たちへー気配の共有から始まる都市単身者住居の提案-	12	6	7				優秀賞
楠目 晃大	砂の方丈	6	5	4				優秀賞
中村 未明	弔	5						佳作
河本 淳史	Image of Reminiscence -都市における水の様態の再構築-	5						佳作
袋井 咲	福良が踊り出す	2						佳作
中川 寛之	都市の拠	1						佳作
小池 真貴	Central of the city	1						佳作

神戸大学建築卒業設計賞 佳作

弔

中村未明（遠藤研究室）

大切な人を失ったとき、私たちはどうその死と向き合い、弔うべきだろうか？自身の葬送の体験を元に考えた。都市の近くの人工島で、水路を舟で巡り、葬送を行う、葬送の場を提案する。そこでは、故人のことだけを考え、気持ちの区切りをつけ、故人のいない日常という現実をこれからも生きる為の心の準備をする。



Image of Reminiscence—都市における水の様態の再構築—

河本淳史（足立研究室）

都市に現存する水の有り様の、何と非自然的なことであろうか。人々は見せ掛けの自然の中で楽しそうに振る舞い、見せ掛けの充足感とともに帰路につく。本来の自然的な水の在り方を忘れて過ごす貧しさに、気付くことはない。都市にはびこる見せ掛けの『自然的』な水。それは、幾つもの人間の意态の複合によって構成されている。それが解体され、種々の操作の本質を目の当たりにしたとき、人は自らの住む都市における『自然』の異様なまでの人工的構築に気づくのではないか。



福良が踊り出す

袋井 咲（遠藤研究室）

淡路島の小さなまち、福良。観光地でありながら過疎高齢化が進み、かつての活気を失ってしまっている。そこで私が感じる福良の魅力的な風景「自然」「祭り」を魅せる場を形成し、福良の個性や魅力を増幅させるような場を構築する。そして、この建築をきっかけとして地域住人、観光客が交流することにより福良の活性化へと繋げる。祭り、観光、人々を巻き込み、いま福良が踊り出す。



都市の拠

中川寛之（遠藤研究室）

現代都市の高層建築物が立ち並ぶ様は人がつくりだしたものだと思えない、そういった思いから卒業設計を始めた。現代の都市における建築は、ヒューマンスケールからはなれ、均質な床が積み重ねられている。建築は機能を内包するハコと化し、都市空間が目的へ移動するだけの不自由な場となり、人、建築、都市の間に大きな隔たりを感じる。それらがもつともに寄り添って、人が自由に振る舞えるような場所ができるのかと考えた。



Central of the city

小池真貴（楢橋研究室）

無縁社会になりつつある現代において、人ととの交流の場、地域における公共空間はどうあるべきかを考えました。古代より街の中心に位置していた四天王寺と駅前の再開発が進み日本一高いビルであるハルカスの間を計画敷地とする。寺の失ってしまった公共性、現代の公共空間の名前による利用者の限定、資本主義による人の繋がりの希薄化を念頭に、人の居場所となり、交流の場となる公共空間を設計した。

